

出口の見えない内戦・ビルマ・カレン族の闘争

川の水は冷たく優しくかった。私は、山の中を歩き回って身体にしみついた汗と泥を落とすのに、夢中になっていた。そんな私を横目に、カレン兵（KNLA）たちはのんびりと昼飯をバクついていた。雨季の始まった今年5月から6月、第二次大戦前から現在まで、戦火の途絶えたことのない、タイ・ビルマ国境を訪れた。

カレン族の取材を初めて今年で五年目になる。現地状況は訪れる毎に変わっている。国境となるサルウィン河やモエイ河を越え、ビルマ兵の暴力から逃れてタイへ流入するカレン難民の数は、この五年間に少なくとも見積もっても一〇万人以上へと増えている。反政府組織・カレン民族同盟（KNU）の総司令部は、ビルマ軍事政権（SLORC）国家法秩序回復評議会（軍）の攻撃を受け続け、何度も壊滅させられている。九七年九月現在、定まった司令部は置かれていない。補給路が断たれる雨季は、通常は戦闘が止むはず。だが、今年の6月、戦闘は続いていた。夜中一

〇時過ぎ、野営地の山向こうで、八一三迫撃砲で空が真っ白になっていった。

国内で戦闘はなく、「少数民族」への人権侵害はないとするSLORCの公式発表とは状況は全く異なる。ビルマ国内の辺境民族の状況はいつたいていどうなっているのであろうか。現状を自分の目で確認するため、タイ国境を越え、KNUの支配地区に入ってみた。カレン族の村を訪れ、現状を取材するのが今回の主な目的だった。しかし、現地に入ってから一番印象深かったのは、SLORC軍によるカレン族への抑圧だけでなく、ビルマ軍政権に抵抗して半世紀に及ぶ武装闘争続けてきたカレン族の最後の「あがき」とさえ映る、勝ち目のないゲリラ戦であった。

Cと親密な関係を築き始めた中国から政治的・経済的圧力を受け始め、SLORCと停戦をせざるを得ない状況に陥った。カチン族は、地政学的に中国と友好な関係なくしてはその民族の主張も財政的な基盤も確保できない位置にあった。このカチン族とSLORCとの合意によって、一九七五年以来の辺境諸民族の反軍政共闘組織・「民族民主戦線（NDF）」の結末にひびが入った。SLORCは、これまでカチン族に向けていたその軍事力を「カレン族」と麻薬王クンサー軍（MTA）一九九六年一月SLORCに投降）に対して集中させる始めることができた。

五〇年近くの団結を誇って武装闘争を続けてきたKNUは、ここ数年で急速に弱体化し始めた。いくつかの原因を考えてみた。

軍事的後退は一九九三年八月、辺境民族集団の一つカチン族がSLORCと和平合意に達した事から始まった。カレン族とならぶ反政府勢力の雄であったカチン族は、SLOR

D Fとの共闘組織・「ビルマ民主同盟（DAB）」、一九九〇年総選挙で大勝した国民民主連盟（NLD）とDABとの共闘組織・「ビルマ連邦国民連合政府（NCUB）」（暫定政府）の結束を弱めることに成功した。

第二に経済的な要因がある。一九八八年一月、ビルマ軍政府は、「海外投資法」によって国内閉鎖から開

放経済を開始した。この政策転換は、タイ・ビルマの国境密貿易によって莫大な利益を得、それをもとに反政府活動を続けてきたKNUに大きな影響を与えた。カレン軍の元将校は、

一九七五年から八五年の密貿易の栄えた一〇年間で、KNUにとつての「黄金時代」だと昔を懐かしんだ。

このSLORCの開放政策によつてタイ政府は、自国で伐採が難しくなつたチーク材の取引を、SLORCとの間で直接するようになった。かつて、ビルマにおけるチーク材は、ほとんどがKNUの支配下にあつた。国境地帯においてのチーク材の利権は、その昔、タイ KNU間取引であつた関係が、タイ SLORC間への関係へと移つていった。

また、歴史的にビルマ軍は、タイ側へ何度となく国境侵犯を繰り返して、タイ側に脅威を与えていた。これまでカレン族の支配地域をビルマ軍との緩衝地帯に使つていたタイ側は、SLORCとの経済交流を優先させるためにカレン族へ停戦の圧力をかけ始めた。経済的基盤をタイとの密貿易に置き、タイ・ビルマ国境にいる約一〇万人のカレン難民の保

護をタイ政府に頼り、武器の輸入をタイルートに依存するカレン族は、タイ政府側からの圧力に屈せざるを得なくなつてしまつた。

KNU弱体化の三つ目の原因が組織の内部崩壊である。長年の戦闘による厭戦気分とKNUの間に不平等の格差が広がつた。前線の兵士たちの食事は、時には「ご飯」と「味の素」

だけという粗末さ。それに比べて、指導部とその周辺にいる人たちの派手な生活が目立つてきた。三年前まで、弱体化したとはいえ総司令部はビルマ側にあり、カレン兵たちも、「いつかビルマの土地にカレン州をもつんだ」という強い民族意識があつた。しかし、九五年一月の総司令部が陥落し、その後新たに展開していった司令部サカンティスも今年二月に失つた。もう「民族の誇り」だけで戦えなくなつてきた。

カレン軍は数年前まで、約一二〇〇〇名の兵士を抱えていた。しかし、現在では、多く見積もつても兵士の数は、およそ四〇〇〇人まで減つているのである。徴兵ではなくあくまでも自発的参加のカレン軍であるが、先の見えない戦闘に対しての厭

戦とカレン指導部への不信で多くの兵士が武器を置いた。

カレンの村への道は険しい。歩きやすい山道は全てビルマ軍側に押さえられている。ジャングルの中の急な崖や川の中をひたすら歩き続けるしかない。たつた八〇センチほどの「けもの道」を歩いていく。道の両側はほとんど地雷原となつている。

暑さと疲労でふらふらになり、何度となく道をそれ、地雷原に入つてしまつた。暑さの汗が冷や汗になる瞬間である。命を奪うためではなく、傷つけるための地雷だと分かつてもいい気分ではない。こんなところで足が吹き飛んでしまえば、十分な手当を受ける前に出血多量で死んでしまうのではないか。どうしても悪い方向に考えてしまふ。

ゲリラ戦に突入する数年前までカレン軍は、作戦毎に地雷の埋設も地雷に印を入れ、撤去も計画的に行つていた。しかし、今はその余裕はない。ビルマ軍を遠ざけるため、いたる所に地雷が埋められている。もちろん地雷への印もなされていないようだ。前線を移動中、カレン兵部隊長マナー（二八）は、「地雷を使つ

て戦闘を続けるのは、確かに国際法違反で、海外からの支持を得られないかも知れない。でも、今自分たちに残された道はこれしかないのです。目をそらしながら申し訳なさそうに話す彼。言外に私たちの立場を理解して欲しいといっているように思えた。

軍政府側の停戦の条件はカレン軍の武装解除である。軍事的にも経済的にも追いつめられているKNUにとつて、軍政府と交渉する切り札はない。歴史的な対立から、軍政府を信じて武器を置くことに恐怖を抱くカレン側は追いつめられている。「部下が最後の一人になっても戦い続ける。それが私の生きてきた道だ」。軍人として戦ってきた第七旅団の指令官ティ・マウンはそう強く語る。カレン族の置かれている客観的な状況をいくらか説明しても聞き入れてくれなかった。彼も、自分たちが追いつめられていくことには気づいている。しかし、彼にとつてできることは、前線のカレン兵を動かす、村人を抑圧するビルマ軍をくい止めることだけだ。軍政府との和平交渉は政治部門の責任者に任せるし

かない。彼も組織の一員として精一杯のつとめを果たしているにすぎないからだ。

前線を移動中、每晚遅くまでカレン軍の置かれている状況について、数年来のカレンの友人と話し合った。「われわれカレン側にはこの戦いの止め方が分らない。政治的な交渉をどのように進めていけばいいのか教えて欲しい。第三国・機関による調停は可能はないのか」。いつも最後に彼から出された結論であった。

カレン族の取材を始めてから、彼らの置かれている状況を解決するための有効なアプローチはないかを考えてみた。不干渉原則を強く主張するアセアンに加盟を認められた現ビルマ軍政府に政治的な圧力は無力かもしれない。だが、現状を放置するままでは、難民や地雷は増え続ける一方である。

過去二〇年の間に、強者からの暴力の被害に遭い、貧困のもとに追いやられてきた人びとが、世界的な規模で自らを守るために声を上げ始めてきた。彼らは、自らを「先住民族」と位置づけ、国家の中に民族集団と

しての地位を求め始めた。先住民族運動は、国際的なネットワークを広げ、運動に弾みをつけてきた。具体的な成果として、国連の人権委員会の作業部会で、「先住民の権利に関する国連宣言草案」が作られるまでになった。「国家」の側も、これまで存在を認めてこなかったこの集団を無視できない状況になってきた。

確かに、アジアにおける「先住民族」のおかれている状況は世界の他の地域と比べても厳しい。歴史的に「先住民族」運動を引つ張ってきたのは、植民地支配の状況が異なったアメリカ大陸の「先住民族」だったからである。しかし、一九九二年の「アジア・太平洋人権会議」報告書では、「アジア太平洋地域での開発過程で、最も深刻な影響を受けているのは、工業開発文化と反対の文化的枠組みを持つ先住民族である」と指摘があった。またこの会議は、この地域で最も虐げられる人たちは先住民であるとし、「先住民族の土地における大規模開発プロジェクトによつて、生態系が破壊され、先住民族は自分たちを経済的・文化的に維持していくことを不可能にしてい

る。・・・自由で十分な情報に基づいた合意を含む自決権が、先住民の生存を守る重要な権利となる。先住民は自決権を持つべきである」と翌年のウイーン世界人権会議に提言をした。現状を変えようとする動きは確実にある。

ビルマ国内の辺境民族を「先住民族」と位置づけることでカレン族の問題を解決する一步とできないだろうか。私は先日、ジュネーブ在住で国連人権委員会に関わりのある友人にアドバイスを求める連絡をとった。

△写真キャプション▽

・最前線で戦闘に参加するカレン少年兵の一人。

・戦闘の最前線でビルマ政府軍と対峙する若きカレン兵たち。

・サルウィン河をさかのぼり、前線へ向かう。

・モ工河を下り、前線から旅団司令部へ戻るカレン兵。

・傷ついた身体にもかかわらず、戦闘に参加するカレン兵。

・大量に生産される自家製地雷の山。

・焼かれた難民キャンプで少年が失った長靴を捜し求めている。

・難民キャンプが襲撃され、ほとんどの家が焼かれた。

・難民キャンプの学校。

・難民キャンプの結婚式。

・サルウィン河を越え、難民キャンプに到着したばかりの家族。

・平和な暮らしが続いているカレンの村の母と子。